Alraune（アルラウネ）

T.Wlin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｌｒａｕｎｅ（アルラウネ）

【Ｎコード】
Ｎ８９０３Ｊ

【作者名】
Ｔ．Ｗｌｉｎ

【あらすじ】
美貌と華麗さをまとうドリアン・グレイは、常に無垢なものを求めていた。それは、「自分に飽くことのない欲を満たしてくれるから」。そして、今宵も求める・・・最良の糧。

（前書き）

―僕はこの時代の徒花（あだばな）、
みなが欲しがるから咲く―

アルラウネという妖花(ようか)があると
なにかの本で見かけた。
まるで今の僕のようだと思った。
相手が欲しがるものを与え、
その代わり相手はまっさらな服や
食べ物、なんでもくれる。

僕はバジルにモデルとして
才能が花咲くことを、
ヘンリー卿には興味を与えた。
代わりに彼らは僕に心酔している。
嫌おうがなく。

そして、今日もまた僕の香りを
嗅ぎつけてきた輩(やから)が来る。
近衛連隊に所属している
青年だそうだ。
「おうわさは、
かねがね伺っております」
少しはにかむように手袋をはずし
握手を差し出す青年は、
確かに若くてりりしい。
ヘンリー卿の様などこか
欲めいたものも、
バジルの律儀なまでの貞淑さも
なさそうだ。
あいにくと今日はこの二人がいない。

好都合だと思った。
「どんなうわさかな」
「あちらこちらのサロンで、
話がうまくまた物腰が
柔らかい品のよろしい紳士が
いると伺っております」
「僕のこと？それは」
「間違いないと今、確信しました」
もっともらしい、
軍人らしい言い方ではきはきと、
それでやや興奮気味に話す。
僕は“面白い”と思った。
叔父さんや叔母さん、
それに少々女性相手も
飽きてきていた。
（求めるばかりの能無しな連中
なんておもしろくない。
こういう興味津々な
奴の方が、ちっとは楽しめそうだな）
「ここも少々退屈してたところだ。
どうだろう、場所を変えてみる
というのは」
「いいですね」
「じゃあ、行き先は
君にまかせようか」
この一言が相手の心を擽（くすぐ）る。
「はい！」
彼は意気揚々と馬車を
呼びに行った。
僕の中でまた、花が咲く。

彼が選んだ部屋は、眺めも
部屋の調度も申し分ないもの
だった。
なじみのホテルだろう。
「どうです、一杯」
「いただこう」
フランス産のワインが、
血に近く甘い色を
たたえてグラスにこぼれ落つ。
「誰もかれもが、あなたの真似を
しているようだが、
所詮かないませんね」
「そうかな。
中には、僕よりいいと思う
男(ひと)もいるけど」
これは奢れる者の言葉。
「いえいえ、誰もかなうものですか。
あなたには、その身にまとうものだけ
でなく、“中身”がおありだ」
「ほう」
めずらしいな、
見(み)て刳(く)れだけで判断して
ないなんて。
「サロンの片隅で見るのがやっとで、
そこはかとなく聞こえてくる話を
耳にいれるのに、苦労しましたよ。
いや、あの話一つ一つが昼の日に、
夜の灯りにきらめいて散るのは、

心ゆさぶらずにはいられません」
「お褒め頂き、痛み入ります」
僕は軽く頭を下げた。
「いやいや、お礼を言うべきは
私です。
固い軍人同士の付き合いしか
知らなかった私に、
かようなきらめきの一時を
与えてくださったのですから」
ほら、“きた”
この言葉を待っていた。
なら、与えよう。一時の快楽。
「この部屋に泊まることは」
「ええ、大丈夫ですよ。
こんな時間になってしまい
ましたし、私はどのみち、
泊まるところを探さなければ
なりませんでしたから」
「君はいい話相手になりそうだ、
どうだろう僕も泊まっていいかな？」
僕はこの上ない愛想のよい
笑顔を浮かべた。
「え、よろしいんですか？」
「ああ、僕を縛るものは特にない。
独り身の一人暮らし、
壁に向かって一人言言いながら、
過ごす夜は退屈なものだからね」
とコロコロと笑う。
相手も、なにもないただの笑顔を
返してくる。

清々しさすら感じるこの空間も、
遅かれ早かれ濃密な香りに包まれる。
僕がもっとも好む香りに。

さっきまで、大人しげな顔を
していた青年が、乱れた顔を
見せると、
僕の快感が目を覚ます。
抱かれるのも、抱くのも悪くない。
彼も、僕の乱れた髪・四肢、
さらけ出された全てに
ワインの酔いの手伝いも
あってか、酔いつぶれるように
なだれ込む。
アヘン窟のような陶酔と夢煙。
見えるはずのないその蠱惑(こわく)の香りが、
たまらなく肺を満たす。
そうだ、これが欲しい、
もっと欲しい。
すがりつくように、
抱かれているのか抱いているのか
わからない時間。
夜が明けるのが遅れればいい
と思った。
僕が咲いている時間が長いほうが、
良いに越したことはない。

「私は先に参りますが、
どうかゆっくりと」
夜の悩ましげな時間が過ぎると

彼は自らの職をまっとうしようと
身支度を始めた。
僕は満足だった。
久しぶりの英気を食したような
気がした。
それも、若くてみずみずしい。
「今度はいつお会いできますか？」
僕はベッドからゆるゆると
体を起こすとそのまま彼に
近づいて言った。
「手紙をくれれば、いつでも」
口付けて必ずと念を押した。
もうこれで、彼は僕の香りに酔う
“アルラウネの虜（エサ）”さ。

それから、彼は手紙をかなりの
頻度でくれた。
日々のこと、もちろん会いたいと
懇願してくる手紙も。
手紙はうれしかった。
しかし、体を重ねていくうちに
彼の価値は下がって行った。
もう食い尽くした感がしてきた。
やがて、手紙が来ても返事を
出さなくなった。
飽きた。
それが僕の口から出た。
あるとき、窓辺まで来て彼が
叫んだ。

それは、アルラウネが
引き抜かれるときに上げる悲鳴より
感に触る声だった。
僕は窓を開けていった。
「君には、もう興味がないんだ」
彼は顔に手をあて、走り去った。

彼は死んだ。
そう僕に
“全て吸い尽くされて”
僕というアルラウネを
いつまでも抱いていようとした罰さ。

僕は、それでも咲かずにはいられない。
だって、それが僕の生きる糧なんだから。

あのバジルの絵が、
僕の醜悪の身代わりになり続けるのなら、
僕はまた探す。

次の糧を。

【Ｄｉｅ　Ｅｎｄｅ】

（後書き）

【萌えカス】

ドリアン・グレイの肖像ネタです。
２００９．９．１１にひとまず
イギリスとアメリカで公開予定、
わたしの大好きな
Ｂｅｎ　Ｂａｒｎｅｓが主演、
主人公のドリアン・グレイの役を
演じます。

もともと某ゲーム「女神転生」の
金子一馬氏が描く「アルラウネ」が
美青年だったのもあって、
しかも人の精を吸い妖しく咲く花
だということもあいまって、
ドリアン・グレイに被せて
書いてみました。

アルラウネは刑場に咲く無念と
妖艶の花、
マンドレイク（マンドラゴラ）の
仲間で、
ドイツ系の伝説の花です。

人の精を頂いてとか、
コボルト（小人）のように
服や食べ物をもらうと、

先見の知恵をくれるとか、
その人の望みをかなえてくれると
いったことをするようです。
一方で、相手がなにも
与えてくれないと枯れたり、
その人の元を去るようです。

ドリアン・グレイの方は、
絵描きのバジルが
ドリアン・グレイのよからぬうわさを
聞き、詰め寄るシーンで、
どうやら男も堕落させていると
いうような記述があったので、
そこをちょっと取り上げてみました。
いわずもがな、作者の食指が
もろ動いたということでｗ

これを書いている中で、
かつてウィーンで泊まった
１８９０年代のホテルを
思い出しながら書きましたよ。
猫足のバス、
その当時から変わらない調度。
見事だったのを、覚えています。
ホールも、バーもその当時のまま。
元は、ハプスブルグ家のもの
だったそうです。

なんとなく、この時代が好きですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8903j/

Alraune（アルラウネ）

2010年10月20日18時29分発行